

事例4

特集Ⅱ 好奇心や探究心を高める学習活動

手応えを実感し、喜びや自信につながる飼育活動

～第二学年「めざせ！生きものはかせ」の実践を通して～



大嶋悠基

札幌市立円山小学校教諭

はじめに

児童を取り巻く自然環境や社会環境の変化によって、日常生活の中で自然や生命と触れ合い、関わり合う機会は乏しくなっている。このような現状を踏まえ、生き物への親しみをもち、生命の尊さを実感するために、継続的な飼育・栽培を行うことには大きな意義がある。

これは「小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 生活編」において、内容（7）「動植物の飼育・栽培」の中で記述

されているものである。生き物を継続的に飼育する過程は、新鮮な発見や驚きの連続にあふれ、自然や生命の不思議さや尊さに気付くといった、他の内容では味わえない学習効果をもたらす。そして多くの場合、継続的な飼育活動は子供にとって未知の体験であり、そこからは、挑戦する意欲やわくわく感といった好奇心や、探究心を高めることが期待できる。さらにこれらは、生活科における「学びに向かう力、人間性等」の育成にも大きく寄与するだろう。

1 子供や学校の実態

本校は、札幌市のほぼ中心に位置し、市を代表する大きな公園や、国の天然記念物に指定される原始林を校区に含む自然豊かな地域の学校である。

そのような環境にあっても、子供が日常生活において自然や生命と触れ合い、関わり合う機会は乏しい現状にある。生き物の飼育に関して高い関心を示す子供が一定数いる一方、生き物に苦手意識をもっている、あるいは飼育の経験自体がほとんどない子供もいる。

そこで、どの子供も年間を通して好奇心や探究心を高めながら飼育活動が続けられるようにした。

2 単元の概要

本実践は、生活科の内容（7）「動植物の飼育・栽培」に基づき、その構成に当たっては、一年生における飼育活動の成功経験を大切にしている。学年目標でもある「パワーアップ」を合言葉に、昨年度よりも活動や自分たちをパワーアップさせたいという一人一人の意欲を諸活動で大切にしてきたこともあり、本単元では、子供の「生き物博士になりたい」という言葉から単元名を決めた。

(1) 単元名

「めざせ！生きものはかせ」

(2) 単元の目標

一年生のときの飼育活動から一層パワーアップした「生きものはかせ」を目指す活動を通して、多様な生き物の飼育で得た知識を生かして対象の特性に応じた世話の仕方を工夫するとともに、生き物には自分たちと同じように生命があることに気付き、生き物への親しみや愛着が増したり、お世話の仕方が向上した自分への自信を深めたりできるようにする。

(3) 単元計画（全一五時間）

① 小単元1（二時間）

「2年生ではなにをしようか」

・目指したい「はかせ」のイメージを出し合い、飼育活動への意欲を高める。
・昨年度の生活科の飼育活動を想起し、今年度の飼育活動に向けた思いや願い、見通しをもつ。

② 小単元2（二時間）

「いろいろな生きものをかってみよう」

・常時、飼育活動をするともに、月一回程度、飼育をして見付けた発見やお世話の困りごとなどを「生きものタイム」として全体で相談し合う。
・新たに他の生き物も飼う場合は、その都度話し合う。

・飼育の専門家（地域の動物園）からよりよい飼育の仕方について教えてもらう。

③ 小単元3（二時間）

「生きものはかせになれたよ」

・飼育や観察をして気付いたことなどを博士の研究としてまとめ、動物園の飼育員に発表する。

3 指導の工夫のポイント

(1) 生き物とじっくり関わる場の設定①（できごと）の醸成

飼育活動は、春先、A児がエゾサンショウウオの幼生を学級にもってきたことがきっかけとなって始まった。一年間を通して、いくつかの種類の生き物を飼育したが、最初から学級の子供全員が同じモチベーションで生き物博士を目指していたわけではなかった。学習の導入時にアンケートをとると、ほとんどの子供が生き物を飼育することに前向きであったものの、約二割の子供は生き物を飼育することに不安や抵抗感をもっていることが分かった。

とりわけB児は、当初生き物を見るのも「ぞっとする」と言っており、自ら関わろうとはしていなかった。担任としては、その子供の思いを受け止め、無理に関わらせようとはしなかった。しかし、周りの子供が生き物と楽しそうに関わる姿にB児も少しずつ興味をもつようになっていった。そんなときに、エゾアカガエルのおタマジヤクシが幼生から成体になる過程で尻尾がなくなるという現象を学級の子供が目当たりにした。学級では、そのことが大きな話題となったが、B児は尻尾は取れてしまったのではないかと推測した。しかし、同じように

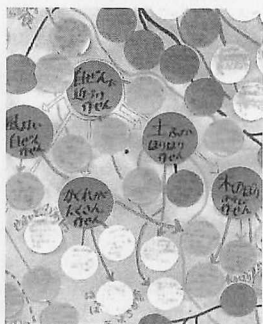


写真1 「いろいろな作戦」(けんきゅうボード)

豊かななって新しい発見や意欲につながった。他のグループのボードの書き込み一つ一つを読んだD児は、「カナヘビは、暖かい所が好きだっていうのは、私たちも気付いていたけど、日向ぼっこ作戦までは思い付かなかったな。面白そうだからやってみよう」と発言し、日向ぼっこや暖房器具を利用した「あたため作戦」を実践した(写真2)。

(4) 外部の専門家の活用(活動の「本物」化)

飼育活動の過程では、「生きもののタイム」でも解決できないことがあった。そのとき、E児は、遠足で訪れた円山動物園の爬虫類館に、自分たちが飼育している

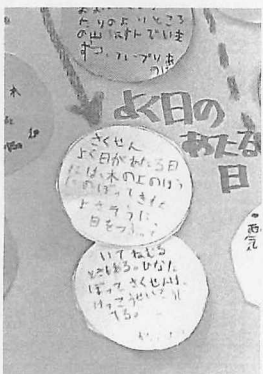


写真2 「作戦の成果」(けんきゅうボード)

のと同じ生き物がいたことを思い出した。「円山動物園の飼育員さんなら、分かるかな」と発言すると、F児が「プロだから、本当の生き物博士のはずだ」と続いた。この発言をきっかけに、休日に円山動物園に通って観察したり、直接、飼育員に話を聞いたりして、子供が現れた。

そこで、実際に爬虫類館担当の飼育員Kさんに教室に来てもらい、自分たちの飼育の様子を見てもらった場を設定した(写真3)。「さすが本物の生き物博士だ」「Kさんみたいな生き物博士に自分もなりたい」と、飼育員の姿に強い憧れを抱いた。

単元の終わりには、再び飼育員のKさんを招いて、自分たちの研究成果を発表し、生き物博士としての実力を評価してもらった。

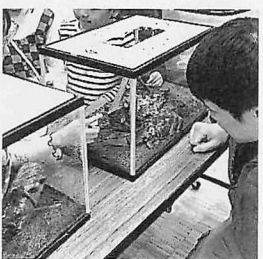


写真3 飼育員を学校に招く

自分たちの目標となり得る本物の生き物博士の存在もまた、子供の好奇心や探究心を高める効果を生むのである。

おわりに

地域を探せば、飼育可能な生き物が複数種類存在しているものである。それらを教材研究で発掘すること、飼育の主体である子供が飼育の可否を判断できるようにすること、気付きを蓄積し自信につながる手立てを講じること、専門家という人的資源を効果的に活用すること、こうした要素が継続的な飼育を通して好奇心や探究心を高めるポイントになると考える。

(おおしま・ゆうき)

考えた子供と飼育ケージ内をよく調べてみてもその痕跡が見付けられない。「怪我しているように見えないから、取れたわけじゃないよ」と言う子供もいれば、「本に「身体に吸い込まれる」って書いてあったよ」と主張する子供も現れた。B児はそれでも尻尾が取れたのではという思いを払拭できず、毎日少しの時間を見付けては観察して調べるということを始めた。その観察の中で、「尻尾は少しずつ短くなっていくんだ。いきなり取れるわけではない」ということに気付いた。B児は「生きもののタイム」の中でそのことを全体に報告し、「よく観察して変化を見付けること」が研究では大切であるということが実感をもって共有された。

この活動を通して、B児は生き物に対する見方が変わっていき、「だんだん可愛くなってきた」と言うようになった。学習の終わりにB児は自分自身を振り返り、「私のよいところは、発見するところなので、生き物博士になれたんだと思いました」と記している。

長い時間をかけて生き物にじっくり関わる事ができるようにしたことで、もともと生き物が苦手だった子供も飼育への抵抗感が低くなり、「生き物博士」と

しての研究ができる心理的な安全性を保障できたと考える。

(2) 生き物とじっくり関わる場の設定②(生き物研究の深化)

日常的に様々な生き物とじっくり関わる時間を保障することで、子供は生き物の個々の多様性や共通性にも気付いていった。

例えばC児は、カナヘビがなかなか餌を食べてくれないことに悩んでいた。本に書いてあった通りに、カナヘビが食べるという「生きた虫」を校庭で見付けてきて何度あげても食べてくれないのである。そんなときに、それまで飼育していたツチガエルが隠れ家作戦で餌を食べてくれるようになった経験思い出して、カナヘビの安心できる環境を研究するようにになった。高いところに上るのが好きなカナヘビのために枝や葉を持ってきて飼育内に設置したり、土粘土でトンネルのある山を作って置いたりした。また、本でカナヘビは日向ぼっこが好きだということを知ったC児は、飼育ケージの陽の当たり方を工夫してカナヘビが日向ぼっこをできるようにした。こうした試行錯誤を経てカナヘビは餌を食べてくれるようになった。振り返りの中でC児は、「生き物によって、好きな場所や好

きなものは違うんだなって思いました」と書き、同じカナヘビでも嗜好性や性格が違うことに気付いた。

(3) 「生きものはかせ」を目指して研究を進める活動(手応えの実感)

飼育活動の一層のパワーアップという目標に向け、子供が自分自身を「生きものはかせ」、飼育活動を「おせわ」ではなく「けんきゅう」と呼ぶことにした。これが活動を通してより多くの気付きを得る効果をもたらした。気付いたことは、すぐに一人一人の「けんきゅうノート」に記録されていく。気付いたことをいつでも、好きなだけ表現できるよう、「けんきゅうノート」の用紙を教室内に用意していたこともあり、中には一日に何枚も書く子供や、年間で一〇〇枚を超える枚数を書く子供もいた。枚数が多くなればなるほど、目に見えて「けんきゅうノート」は厚くなっていく。その分厚さに、子供は自分の頑張りを認識し、活動に対する手応えを実感することができた。

教室環境では、子供一人一人の気付きが共有・視覚化される効果をねらい、教室に「けんきゅうボード」を用意した(写真1)。これによって、友達への気付きとの関連を見いだしたり、観察の視点が